

月刊

2019

1
月号

みんぱく

特集

凧



世界の凧、アジアの凧 塚田誠之
インド・パキスタンのけんか凧 小西正捷
オセアニアの漁撈用の凧 林勲男
タイの凧揚げ今むかし 岡部真由美
インドネシア、中部ジャワの凧事情 今村宏之
パレスチナの凧揚げ、夢と現実 菅瀬晶子
グアテマラの大凧 八杉佳穂

翼の平面形の使われ方

長距離または長時間飛行するには、翼は横に細長く、面積の割に翼幅の大きい翼が要求される。それは翼に影響されて下に向かう空気の容積が、翼幅を直径とする円柱に比例するからで、したがって翼幅の二乗が物を二乗。

滑空機や旅客機の翼は横に細長い。ただしこれでは迎角が大きくなると空気の流れが翼から剥離して失速し、翼が機能を失うので、戦闘機のように運動性を強く要求される機体の翼幅は小さい。迎角が大きくなっても機能を失わないように、翼幅は短くしてある。

昔、スキージャンプでは、スキートの板はお互いに左右に離されて平行であった。したがって上向きに働く揚力は十一の二であった。それをお互い同志くつつけて、一つの板のようにしてしまおうと、翼幅が倍になるので、その二乗に比例して揚力は四となり、飛距離は伸びる。私の恩師の故・谷一郎教授の進言に従って札幌オリンピックでは板を揃えて飛んだ日本チームは一位から三位までを独占した。

しかし今はスキートの板を逆ハの字に開いて飛ぶので、斜めの板で横幅がさらに拡がって飛距離もそれなりに良くなっている。
風揚げでは、矩形の和風を縦長にして揚げると、

東 昭

プロフィール
1927年神奈川県生まれ。東京大学工学部卒業後、川崎航空機工業株式会社（現・川崎重工株式会社）に入社。マサチューセッツ工科大学客員研究員、東京大学教授、メリランド大学客員教授を経て、1988年から東京大学名誉教授。ヘリコプターやロケットの設計に携わる一方、生物の飛行について力学を用いて研究してきた。『模型飛行機と風の科学』（電波実験社）、『生物の動きの事典』（朝倉書店）など著書多数。

尻に働く空気力は、上向きの揚力より後向きの抗力の方が大きく、風の引きは強く、上る高さも目で見易い位置になる。これに対して、ゲイラカイトと呼ばれる三角形の洋風は、翼幅が大きいので揚力の方が抗力より大で、尻の上る位置は頭上に来るし、糸の引きは弱い。力の弱い女性や子供には安定して揚げ易いが、男の子や大人にとつては、これでは物足りないし、首も疲れる。

樹間や町中を飛ぶ雀は運動性を要求されるので、翼幅の短い翼が必要であるが、遠距離を飛ぶ燕や信天翁といった渡り鳥の翼の翼幅は大きい。

花から花へと飛ぶ蝶の翼の翼幅は短い、遠距離を飛行する蜻蛉の翼は翼幅が大きい。

魚の尾鰭も同様である。海藻の中や珊瑚礁の回りに群れる小魚達の尾鰭は団扇のような形なので、止まったり進んだり容易である。しかし鮪や鰹のように広い海を泳ぎ続ける魚の尾鰭は三日月型で翼幅が大きく、低速では機能しないが高速遊泳に向いている。

釣りで鰲を引つかけると、始めは物凄い勢いで糸を引っ張られるが、段々手元へ寄せて来て、最後に速度が落ちてしまおうと、もう抵抗出来なくなつて取込みが容易になるのは、そのためである。

10 ○〇してみました世界のフィールド
「国立民族学博物館コレクション 貝の道」を
旅して
朝木 由香

12 みんなく Information

14 想像界の生物相
ヒマラヤの雪男イエティ
古川 不可知

16 新世紀ミュージアム
食の博物館
宇田川 妙子

18 シネ倶楽部 M
台湾における民主主義と同性婚
——「GF*BF」
野林 厚志

20 ながなんちゃ
風の名前はジャーゴンなのか？
福島 あずさ

21 次号予告・編集後記

1 エッセイ 千字文
翼の平面形の使われ方
東 昭

特集 風

2 世界の風、アジアの風
塚田 誠之

4 インド・パキスタンのけんか風
小西 正捷

5 オセアニアの漁撈用の風
林 勲男

6 タイの風揚げ今むかし
岡部 真由美

7 インドネシア、中部ジャワの風事情
今村 宏之

8 パレスチナの風揚げ、夢と現実
菅瀬 晶子

9 グアテマラの大風
八杉 佳穂

月刊

みんなく

1月号目次

特集

凧

世界の凧、アジアの凧

塚田 誠之 つかだ せいゆき 民博名誉教授

凧揚げは、日本では一般に正月の風物詩になっている。最近では、都市での広場の減少や少子化、遊びの多様化などで子どもが凧揚げをする光景を見る機会は減少している。しかし、冬休みには凧作り教室が開催され、正月の装飾にも用いられる。正月に限らず、日本各地で自治体などが主催するさまざまな規模の凧揚げ大会がおこなわれているのをメディアで見かける機会も少なくない。

凧揚げの起源

凧揚げの歴史について、特に中国が起源地のひを吹かせ、楚軍の兵士の士気を萎えさせたという。このように軍事目的で始められた凧揚げが、娯楽として庶民に広まるのは、紙が普及した一二世紀、北宋時代以降のことで、清代になると正月に欠かせないものになった。

各地に根づく風習

中国では、凧揚げは子どもだけでなく大人の手軽な娯楽として発展してきた。大人でないも揚げることでできないような長く大きな連凧や技術の必要な複雑な作り物もある。マレーシアでは四〇〇メートルを超えるほど高く揚げ、高度な操作技術を要する糸切り合戦がおこなわれるので大人も多く加わる。なお、けんか凧は日本、朝鮮半島などでも見られる。

中国では正月（旧正月）から清明節（墓参りの日、四月五日前後）のころまでが凧揚げの季節だ。北京では秋から清明節にかけて農閑期で、空気が乾燥して凧揚げに適した風が吹くことが多い。日本では



マレーシアの凧「ワウ・ブラン」(月凧)。尾部は三日月をかたどったもので、マレーシア航空のシンボルマークにも図案化されるほどポピュラーである。他にも種類が多いが、いずれも他国にはない独特の形をしている (H0172999)

お正月の風物詩、凧揚げ。それは日本特有の風習ではない。世界を見渡せば、凧の形状や素材、模様はもちろん、役割においても日本とは異なるさまざまな習わしがある。人びとは凧に何を思い、空高く揚げるのか——。今回は、そんな凧にまつわる各地の文化を紹介したい。

とつと考えられている。日本へは八世紀に遣唐使がもち帰ったのが最初であるらしい。朝鮮半島の凧も中国伝来である。東南アジアやオセアニア、欧米にいたるまで世界中で広くおこなわれていることからすれば、それぞれの地域で独自に発明された可能性があるが、中国で早くに考案され、長く伝承されてきたことは間違いないようだ。

中国では凧を「風箏」といい、「風の琴」を意味する。一〇世紀に宮廷で笛をつけた凧を揚げて、その音色を鑑賞したことにちなむ（なお、「凧」は日本で作られた漢字である）。また、形が鳶に似ていたので紙鳶ともよばれた。その起源は軍事用であったといわれる。紀元前三〇〇年ごろに墨子やその弟子公輸盤（魯班）が木製の鳥の形の凧を揚げて、敵の城の防御状況を偵察しようとしたという。また、漢の劉邦が垓下の戦いで、楚の項羽を包囲した際に、大きな凧を作り、その下部に吊り籠をつけて笛を吹く者に乗せて楚軍の頭上において故郷の曲



清末のころの北京の凧揚げ。中国文学研究の泰斗、青木正兒（まさる）博士が編集した清末・民国初期の北京の風俗を伝えた史料である。【出典：『北京風俗図譜』七・遊楽「童子嬉戯（どうじきぎ）——其一」（東北大学附属図書館蔵）】

正月のほか、子どもの誕生の祝いや成長祈願を目的として端午の節句や、それぞれの地方でよい風の吹く時期や祝祭に合わせておこなわれることもある。マレーシアでは稲の収穫が済んだ四月から六月にかけて揚げられ、インドでは地域によって異なるが、一月二四日ごろや八月一五日ごろに揚げられたところもあるようだ。凧揚げの時期はところによってずいぶんちがう。なお、娯楽以外にも実用的な目的でおこなわれるものもある。ソロモン諸島などでは、かつて凧を揚げて水面近くを泳ぐダツを釣る「凧揚げ漁」がおこなわれていたという。また、マレーシアなどでは今は娯楽というよりも政府主導で独立記念日などに大会がおこなわれるという。

見て楽しい凧の形

凧の形は各国で異なる。日本では角形のものが多いが、菱形、円形、細工凧、やつこ凧などさまざまなものがある。マレーシアでは飛行機のような独特の形をしている。中国の場合、鳥なら鳥、魚なら魚そのものの形をしているのが特徴で、その種類も多く六〇〜七〇種あるとされる。鳥（タカ、ツバメ、ツル、フクロウなど）、昆虫（トンボ、セミ、蝶、テントウムシなど）、水の中の生き物（魚、カエル、カニなど）、パンダ、果物や野菜（モモ、ハクサイなど）、想像上の動物である龍・鳳凰、人物（孫悟空、魔除けの神とされる鍾馗、ダルマなど）など。語呂合わせや吉祥の絵柄も好まれる。

このように凧の形や時期、意味合いなどは異なるが、凧揚げを楽しむ行為はおおむね世界共通である。人びとの暮らしが変わっても、凧揚げは世界各地でおこなわれ続けている。なお、アジアの凧について、さらに詳しく知りたい方は『みんなく発見4 アジアの凧』（塚田誠之編、千里文化財団発行、二〇〇〇年）をご覧ください。



龍頭ムカデ凧と筆者（北京、2003年9月）



100畳敷東近江大凧（2012年）[提供：世界凧博物館東近江大凧会館]

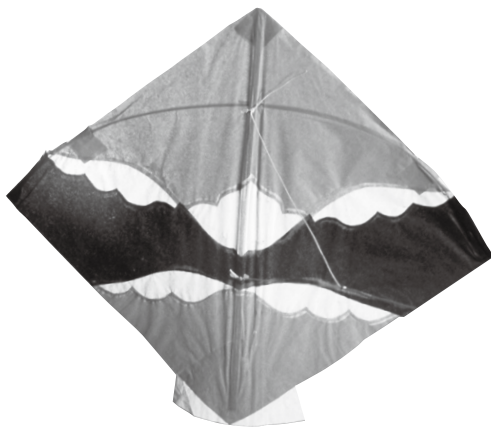
インド・パキスタンのけんか凧

小西 正捷 立教大学名誉教授

年の節目に揚がる凧

西インドのアフマダーバード市中では、昨日までの小間物屋・靴屋・用品屋が、一夜のうちに一斉に風屋に変わった。破れやすく、糸が切れて行方知らずとなることも多いし、一枚数円ほどの値段なので、数百枚という単位で凧を抱えて帰っていく客もいる。これは北インドの他の都市でも同様の風景である。

今日はヒンドゥーにとつてのマカラ・サンクラレントイという祭日。風揚げがこの日だけに限られているわけではなく、北行してきた太陽のめぐりがこの日以降南行するため、冬が終わり春が始まるという年の節目が意識されている。風揚げといえども我々には正月行事というイメージが強いが、インド



典型的なインド・パキスタンの凧。三色の薄葉紙(うすようし)を貼り合わせている。パキスタン・ラーホール市で入手(1982年)

パキスタンでは「正月」は各地各様であつて、一概にそれがいつとは限定できない。南インドのポンガル祭や、東インドの春の大祭ヴァサント、あるいは年よつて日どりは大きく動くがムスリムにとつての大祭イードなどが、一年の大事な節目となる。

人びとを熱狂させる勝負

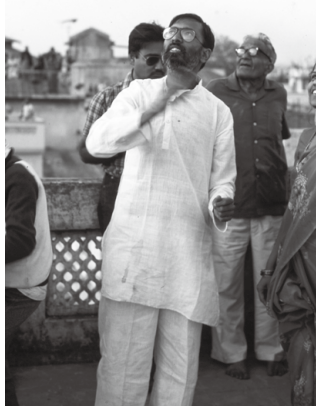
一方、商人たちやその社会にとつてはむしろ、帳簿をすべてあらたにする秋のさなかのデイワリー祭が最大の節目である。グレゴリオ暦の正月や、ましてクリスマスには町は何事もなくひっそりとしているが、文具屋や本屋にはデイワリーになるとクリスマスカードならぬデイワリーカードが並んで、「年末」の気分を盛り上げている。ただし凧は、ど



上: 凧を作るムスリムの子どもたち
下: 凧より重要かもしれない凧糸。練った米粉に少年がガラス粉をまぜて凧糸を用意している(ともに西インド・アフマダーバード市、1985年)

の季節に揚がっていてもおかしくはないので、季節のいかんにかかわらず、大都会ならいつでもどこかで似たような凧が揚がっているのが見られるだろう。宗教や地域には必ずしもこだわらない鷹揚さ、単純な幾何学文もあいまつて、そっくりな凧が国や地域を越えてインドやパキスタンのどこでも見られるのだ。

それだけでなく、その一見単純な操り方や遊び方が人びとを熱狂させることも大きな特徴である。すなわち、そのデザインからして扁平で、菱形ながら尾すらないので揚がりにくい、揚がっても上下左右に激しく旋回して他の凧や凧糸に絡んで糸を切るため、いくつもの凧を撃沈したかが強い凧の証となる。このけんか凧には強い糸が必須で、そのため凧糸には念入りにガラス粉が練り込まれていて、凧を操る人には革の手袋が欠かせない。高みからの勝負とばかり屋上から空を見上げたままでの凧揚げは危険だし、糸の切れた凧を追って道を走り回る子どもたちの交通事故も毎年報じられるが、それでもけんか凧の熱は簡単に収まりそうにはない。



敵の凧の糸目を狙って、屋上から熱心に凧を操るアフマダーバード市民(1985年)

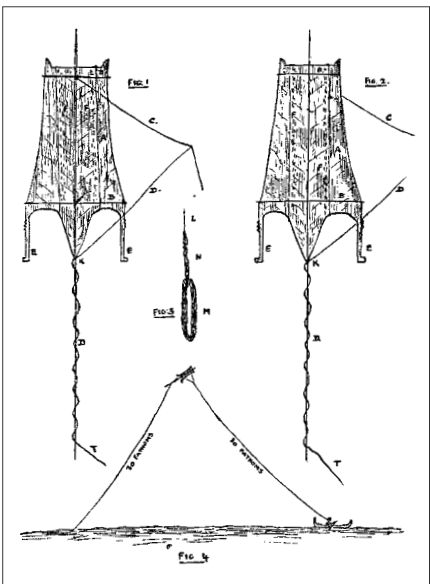
オセアニアの漁撈用の凧

林 勲男 民博学術資源研究開発センター

凧を用いる漁法は、東南アジアからミクロネシアやメラネシアにかけての島嶼部で広くおこなわれていた。ソロモン諸島では、凧から吊り下げられた釣り糸の先端に付けるのは、クモの糸であつた。クモの糸を集めて擬餌とし、釣り針は付けない。狙うのは、体が細長くて両顎が前方に尖つてノコギリ状に鋭い歯が並んだダツである。ダツが餌だと思つて噛みつく、その歯や顎にクモの糸が絡まると身動きができなくなつてしまふ。それを船にいる漁師が手繰り寄せられるわけである。

凧と擬餌

凧はサゴヤシかゾウゲヤシの葉を用いて作ったものが多い。葉と葉を接合したり強度を増したり



エッジ・パーティントンが描いたソロモン諸島のマライタ島の漁撈用凧
【出典:T.W. Edge-Partington (1912) Kite Fishing by the Salt-water Natives of Mala or Malaia Island, British Solomon Islands Man vol.12】

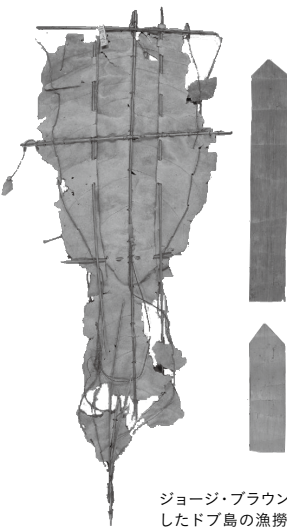
するために葉柄(葉を支える柄の部分)や細い棒を使うものもあつた。凧の上部で棒を横に渡し、その中間点から伸ばした紐と釣り糸を結び付ける。釣り糸は凧の中央を縦断する棒の下部に何度か巻き付けたのち海面まで伸ばし、先端に擬餌を付ける。擬餌を作るには、五〇〜六〇センチメートルの細長くて硬い葉をクモの巣の真ん中に差し込み、葉を回すことで糸を絡めとつていく。いくつものクモの巣でそれを繰り返す。葉の全体がクモの糸で覆われると、手元から先端に向けて糸を一気に押し上げてとり外す。その輪の長径を五〜六センチメートル程度にして釣り糸の先端にとり付ける。当然のことながら、この擬餌に掛かった魚を外すのは一苦勞である。

民博の収蔵品から見る凧

民博には、ソロモン諸島以外にもドブ島(現バブ



マライタ島西岸中央部に住むランガランガの人びとの漁撈用凧(H0098894)



ジョージ・ブラウンが収集したドブ島の漁撈用の凧(H0137512)

アニューギニアの一部)とミクロネシアのギルバート諸島の釣り用凧も収蔵されている。前者は英国人宣教師ジョージ・ブラウンの収集によるもので、約三〇〇点ある彼のコレクションのうちの二点がそれである。後者を収集したのは日本人画家の染木胸であった。彼は、昭和九(一九三四)年に当時日本の統治下にあった南洋群島のほぼ全域を巡遊し、現地では民族誌学者のように、風俗や自然を油彩画やスケッチに記録しながら五〇〇点以上の生活品も収集した。そのほとんどが旧文部省史料館を経由して民博の収蔵となっており、そのなかに漁撈用の凧も含まれている。

タイの凧揚げ今むかし

岡部 真由美 中京大学准教授

人びとを魅了してきた凧

日本では、凧揚げは正月の風物詩だといわれるが、タイでは、正月の風物詩といえ「水掛け」である。一年間でもっとも気温が高い四月半ばに、人びとは水を掛け合って盛大に正月を祝う。一方、凧揚げがおこなわれるのは、伝統的に、稲刈りを終えてから正月を迎えるまでの農閑期である。広い田んぼのなかで、暖かい風にあおられた凧が空をゆらめくさまは、何とものどかで風情がある。

タイを代表する凧に、星形の凧ワーオ・デュラーと、ダイヤ形の凧ワーオ・バックパオの二つがある。アユタヤー時代から受け継がれるこれらの凧は、薄い紙と竹で作られ、色も模様もほとんどない。見た目はいたって地味な凧だが、その独特の形状と空中での動き方を生み出すには、熟練した職人



上：ワーオ・デュラーとよばれる星形の凧
[提供：世界風博物館東近江大会館]
下：ふくろうを象ったカラフルな凧(H0005844)

の技が必要とされる。また、身近な動物である鳥、蛇、魚などを象った凧が各地で作られてきた。今日では、ビニール製のカラフルなキャラクターものやメッセージ性の高いものが多く、凧の種類はじつに多様化している。

歴史的にみて、タイでは、凧揚げは民衆の娯楽にとどまるものではなかった。タイ各地の古い寺院の壁画には、王室の儀礼で凧を揚げる様子が克明に描かれ、また凧は厄除けの道具や武器として用いられることもあったようである。一七世紀後半、アユタヤー時代にタイを訪れた外国人高官や宣教師らは、国王が冬の二カ月間、毎晩、凧揚げに興じていたと記録している。ラッタナコーシン時代に入ると、凧揚げの人気はますます過熱し、国王ラーマ五世が主導して王宮前広場で「凧揚げコ

凧揚げのあらたな価値

タイ社会の近代化の過程で、凧揚げは、セパタクローなどの遊戯と同様に、競技としての色合いを強めていく。競技とは、たとえば、ワーオ・デュラーを揚げるグループとワーオ・バックパオを揚げるグループが対抗して複数の凧を揚げてぶつけ合い、地面に落ちた凧の数の多寡を競う、というものである。一九二七年の「シヤム・スポーツ協会」設立は、凧揚げに、タイの「伝統スポーツ」というあらたな価値を与える契機となった。この協会を設立したプレイヤー・ピロムバックデー氏は、凧揚げ競技の達人であったといわれる。凧に造詣が深く、「凧の先生」として広く知られる彼は、凧に関するあらゆる知識をまとめた本も出版している。じつは、この人物こそが、いまや世界中で愛飲されている「シンハ・ビール」で有名なブロント飲料の創立者でもある。

高層ビルやマンションが林立し、幾重にも電線が張り巡らされた都市部では、今日、凧を揚げる場所を見つけたことさえ容易ではない。ましてや、子どもたちを刺激する娯楽は他にもたくさんある。観光化されたイベントのほかに、凧揚げを楽しむ機会は失われつつあるのが現状である。それでも、せめて、「シンハ・ビール」を飲むときには、かつてタイの人びとが打ち興じた凧揚げの風景に思いを馳せたいものである。

インドネシア、中部ジャワの凧事情

今村 宏之 総合研究大学院大学博士課程

祭りとげんか

インドネシア語で凧(ラン・ラン)とインターネット検索すると、インドネシア各地で、凧揚げ祭が開催されていることがわかる。ジャワ島中部の古都ジョグジャカルタの南にあるラン・クスモ海岸では、二〇一三年から毎年一回、州観光局の協賛で国際凧揚げ祭が開催されている。この海岸はインド洋に面し、強烈な潮風が吹き荒れるため、技術がなければ凧揚げが難しいという。龍舞の籠のような頭に一〇〇個ほどの円形の凧を並べて胴体に見立てた、長さ一〇〇メートルもあるナガ(龍)



インドネシア・バリ島でおこなわれた凧揚げ大会(1994年)
[提供：世界風博物館東近江大会館]

凧揚げの思い出

中部ジャワの農村で幼少期を過ごしたジャワ人の友人に聞いたところ、凧揚げはよくする遊びのひとつだったという。彼の当時の小遣いは一日五〇ルピアで、道端で売られているテンペ(大豆の発酵食品)の揚げ物をふたつ買うのが精いっぱいであった。プラスチック製の凧は安いもので二〇〇ルピア、高いものだと一〇〇〇ルピアほど売られていたそう、少なくとも四日は無駄遣いを我慢しないと買えないおもちゃである。田んぼや屋根の上で凧を飛ばし、木に引っかかろうものなら意地でも取ろうとしたし、木に引っかかったまま放置されている凧を見つけたら儲けものだ、と友人は語っ

都市集落の子どもの遊び

筆者は、ジョグジャカルタの都市集落を中心にフィールドワークをしているのだが、街中で凧を見かけた覚えがない。都市集落の空には電線が張り巡らされていたし、幼稚園児や小学生くらいの年齢の子どもたちは、普段は狭い路地を走り回り、自転車遊びやボール遊び、土いじりに興じていた。家のなかではスマートフォンとテレビに夢中であった。どうやら、七、八月が凧揚げのシーズンで、八月一七日のインドネシア独立記念日に合わせて凧揚げをすることもあるという。都市集落の子どものうち、祝日には遠出して凧揚げをしていたのかもしれない。



インドネシアの紙凧。全長は90センチメートル(H0005913)

パレスチナの凧揚げ、夢と現実

菅瀬 晶子 民博超域フィールド科学研究部

子どもの夢を乗せて

多くの日本人にとって、外国の凧揚げを見る機会はあまりないかもしれない。しかし海外に出るようになってまだ間もない二十代前半のころ、わ

たしはエルサレム旧市街の城壁の上で、凧を見た。真夏の七月下旬のことだ。凧揚げをしていたのは、地元のパレスチナ人の少年たちである。凧はもちろ

したいという子どもたちの夢が託されてきた。

時代を映す凧

じつはパレスチナの凧は、日本と多少、かわりがある。東日本大震災の翌年から、ガザ地区では国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）が主催する、被災地との連帯を示し、復興を祈るための凧揚げ大会がおこなわれている。この凧揚げ大会が契機となり、岩手県釜石市とガザのあいだでは交流が生まれ、ガザの子どもたちが被災地に招かれたこともあるという。

もともと、凧というものは元来、敵情視察や攻撃など、軍事目的で開発されたといった説もあるという。ガザ地区の凧も、最近では夢よりも憎しみを託すものになっているようだ。昨年も毎年恒例の被災地復興を祈る凧揚げ大会が開催されたが、その翌月、火をつけた凧が攻撃目的でガザ地区からイスラエル側に飛ばされたこと、各種メディアが報じた。長きに渡って封鎖され、イスラエルから断続的な空爆を受けているガザでは、イスラエルはもとより、パレスチナの現状を一顧だにしない世界に対して、諦念と憎しみが募っている。エルサレムの空に舞い上がる凧を見上げたときから、もう二五年の歳月が流れたが、いつこうに好転しないパレスチナの状況に、わたしも希望を見出せずにいる。



ガザ地区の子どもたちによる凧揚げ(2008年撮影)【写真: Newscom/アフロ】

糸で縛って星形に整え、そこに六角形の紙やビニールを貼った、簡素な作りをしていた。これに赤と緑と黒と白、つまりパレスチナの国旗の色を塗って、夕空高く舞い上がらせるのである。イスラエルの占領政策により、ヨルダン川西岸地区やガザ地区から出ることはもとより、地域内の移動すらままならないパレスチナ人は、空を飛ぶものに強いあこがれを抱く。パレスチナ人映画監督の草分けであるミシェル・クレイフィ監督の作品「三つの宝石の物語」では、ガザ地区に住む主人公の少年が飼う小鳥が、自由への希求を象徴していた。凧揚げ遊びもまた同様で、境界を飛び越えて、世界中を旅

グアテマラの凧

八杉 佳穂 民博名誉教授

死者に捧ぐ大凧

グアテマラ市から西に車で一時間あまりのところにあるサンティアゴ・サカテペクスでは、一月一日と二日の万聖節（諸聖人の日）と万霊節（死者の日）に、墓地で彩り豊かな大凧を揚げる。墓の色を塗り替え、花でいっぱいにして、ごちそうを用意して、亡き人の魂を迎えるが、大凧を見に大勢の人が来るため、屋台がたくさんでて、町の人たちのもつとも楽しみな祭日ともなっている。

凧を揚げるのは、死者を敬い、死者と交流する

ためというが、先祖の霊の来訪を邪魔する悪霊を凧の紙に当てる風の音がはらうからともいう。現在は、いかに美しいか、いかに長いあいだ飛ばすことができるか、を競う場ともなっている。凧は凧揚げが終わると、燃やされ、灰は墓地に埋められる。

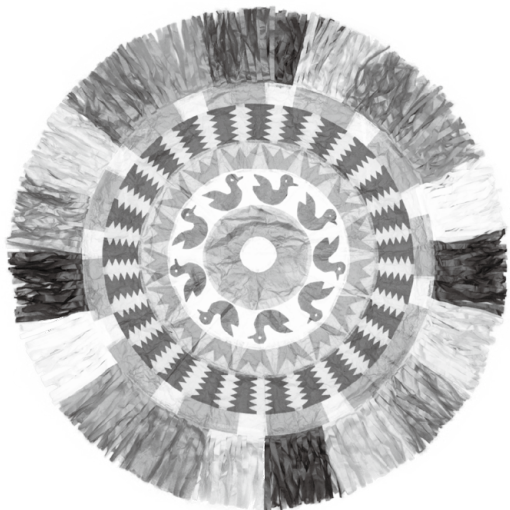
情熱と豊かな経済力

大空に揚げる凧は、直径が二メートルから五メートルの円形である。それ以上の二五メートルから二〇メートルに達する大凧も作るが、それら



大凧とサンティアゴ特有の幾何文様の上衣をつけた女性たち(撮影: 羽村昌弘)

は、立ってかけて見せるためのものである。大凧の骨となる竹は、低地までおりて調達する。長い竹を、凧の大きさによって異なるが、三本から六本ほど放射状に並び、中心部をリュウゼツランの繊維でこしらえた縄でくくる。大きいものになるとその中間にも補助棒を渡す。竹の枠に色とりどりの紙を貼る



大凧は使用後に燃やされるので手に入れることはむずかしい。民博の資料とするためにもった大凧の見本(H0200526)

が、紙はユカ芋の粉とレモンの皮と水で作ったのりで貼りつける。描かれる模様は、宗教的なテーマや人権問題などをとり扱っているものもあるが、幾何的なものが多い。幾何文様が好まれるのは、女性たちが着ている上衣の幾何文様と関係ありそうだ。凧揚げの風習は二〇世紀の初めに始まったという。大凧の制作には、数カ月の日数と数十万円の費用が必要であるが、凧揚げが年々派手になりながら続いているのは、町の人たちの情熱に加え、それを支える経済力がしっかりしているからである。というのもサンティアゴ・サカテペクスは、首都のグアテマラ市に働きに行く人が多く、また首都の需要に応えるべく野菜や花などを生産しており、経済的にわりと豊かだからである。

〇〇してみました世界のフィールド

「国立民族学博物館コレクション 貝の道」を旅して

朝木 由香
神奈川県立近代美術館学芸員



貝の世界を旅してみよう

筆者とバブアニューギニアの彫像 (H0164853)
「貝の道」 展会場 (神奈川県立近代美術館 葉山)

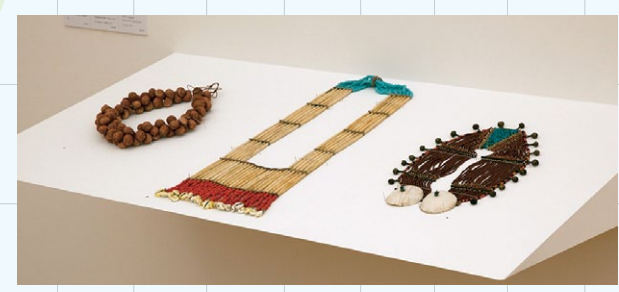
2018年夏、相模湾に面する神奈川県立近代美術館にて、みんなく所蔵の貝細工の資料が展示された。今号では本展覧会「貝の道」の企画・担当者である朝木由香さんに貝をめぐる旅について寄稿してもらった。

昨夏、神奈川県立近代美術館の葉山館では、「国立民族学博物館コレクション 貝の道」展を開催した(六月三日―九月二日)。本展はみんなくの膨大なコレクションから約二六〇点の貝細工を紹介したもので、既にみんなくと取り組んできた巡回展「アジアとヨーロッパの肖像」(二〇〇八―〇九年)、「彫刻家エル・アナツイのアフリカ」(二〇一〇―一二年)、当館企画展「ビーズインアフリカ」(二〇一二年)に続く四回目の共催展である。いずれも民族学、博物館学、美術史学の対話の可能性を博物館と美術館の枠を越えて追究することを目的とし、今回の「貝の道」展では、日ごろ博物館資料とされる貝細工に秘められた造形美を発見しながら、それぞれの貝細工が生まれた社会背景や生活文化を理解し、貝とわたしたちがどのような関係を育んできたのか、そのつながりと広がり―「貝の道」をたどった。

貝をつなぐ

二〇一七年、みんなく開館四〇周年記念特別展「ビーズ―つなぐ・かざる・みせる」を訪れた筆者は、会場を埋めつくす世界中のビーズの多種多様な色、形、大きさに圧倒された。とりわけ印象的だったのがビーズの素材である。人工物、鉱物に加え、動物の骨や歯、魚の鱗、鳥の卵や羽、昆虫、植物の種子など、いわゆる美術展では見かけないものばかりだ。なかでも貝ビーズの歴史はもともと古く、今から七万年―一〇万年前の遺跡で穴のあけられた小さな巻貝が発掘されたという。

自然界に一〇万種類以上もの貝が生



世界中のさまざまな貝ビーズ(「貝の道」展会場 撮影:阿部健)

息しながら、普段、目にする貝はごく一部。そこから人びとが貝の殻を選び、ひとつひとつ手でつないできた営みには、いわゆる食用の貝とは異なる特別な意味が込められてきたのだろう。個々の特徴を活かしながら、切ったり削ったりと造形的にも創意工夫に溢れている。



コンゴ民主共和国の帽子 (H0175275)
「貝の道」 展会場 撮影:阿部健

★
日本
神奈川県葉山

い集めて作る貝ビーズには親和性を感じられたからだ。

タカラガイの道

本展ではとりわけタカラガイに注目した。白くてぷっくりとした背中とギザギザしたお腹の模様を特徴とするこの貝は、生物学的には熱帯から日本を含む温帯の海にかけて生息し、葉山の海にも散見する。なかでもキイロダカラとハナヒラダカラは古来、人の手を介して海をわたる、遠く内陸にまで運ばれて貝貨や装身具として用いられてきた点で民族学的にも興味深い。本展監修者である国立民族学博物館の池谷和信教授は「どうして人類は地域を越えて、時代を越えてタカラガイを求めたのか。美しさを求める人類という視点からこの貝に関心を持っている」と話し、「タカラガイの道」を古代から近世にかけての「貨幣の道」と、近現代以降の「装飾の道」にわけ、その用途は時代とともに変化してきたと指摘する。



ワークショップ「海の生き物を観察しよう」(葉山 一色海岸 2018年7月)

みんなくの所蔵品をタカラガイの視点で改めてとらえると、アフリカ、アジア、オセアニアに広がる「装飾の道」が見えてきた。アフリカではエチオピア高原、コンゴ盆地、カメルーン高地などの内陸部までタカラガイは運ばれた。コートジボワールのダン族やカメルーンのベコム族の儀礼用の仮面、コンゴ民主共和国のクバ族の帽子やベルトなどを見ると、タカラガイを十文字型に並べたり、帽子全体を覆うなど個々さまざまに、黒褐色の木やファイアに白いタカラガイは一層映える。アジアでは、カラールシャ族の頭飾りやパイワン族の衣装をはじめ、色鮮やかな織物や刺繍布にガラス玉、コイン、数珠などの素材とあわせて縫い込められている。一方、海に囲まれ、古くから地域間の交易が盛んなオセアニアでは伝統的な貝貨や婚資用の装飾品に、タカラガイ、イモガイ、クロチヨウガイ、ムシロガイなどさまざまな貝が用いられている。バブアニューギニアのセビック川流域に見られる「神像付きの椅子」の顔には全部で六種類もの貝が施されている。

このように、タカラガイがたどった道からは、それぞれの地域の人びとの貝への思いや、地域を越えた交易のネットワークの広がりが見えてくるとともに、その造形的な面白さは見る者を魅了する。最後に、当館の目の前にある葉山の貝の道も紹介したい。会期中、隣接する葉山しおさい博物館と協力して、海岸で生きた貝を拾ったり、地層に眠る貝の化石を顕微鏡で観察するワークショップをおこなった。まさしく時空を越えて今につながる貝の道を旅した夏であった。

特別展

「子ども／おもちゃの博覧会」
明治時代以降における日本の社会の大きな変化は、その時々の子どものありようや人びとの子ども観に影響を与えました。本展では、江戸時代から戦後のさまざまな玩具をつつじ、子どもや子どもをめぐる社会の変遷とその意味を探ります。
会期 3月21日(木)～5月28日(火)
会場 特別展示館

企画展

「旅する楽器——南アジア弦の響き」
南アジアの弦楽器は、中央アジアや西アジアから伝えられた楽器が改良され定着したものが多く、そのいくつかは南アジアでの変容を経て東南アジア、東アジアにも伝えられました。楽器が広大な地域を旅して伝播していく様子を、ユーラシアにおける長期的な文化交流を実感してください。
会期 2月21日(木)～5月7日(火)
会場 本館企画展示場

年末年始展示イベント

「3G」
2019年の干支である「いのしし」をテーマに、みんなく所蔵の資料や写真を展示し、世界各地の「いのしし」を紹介します。
日時 1月19日(土)13時30分～15時(13時開場)
会場 本館セミナー室
参加費 無料
※参加券を当日12時30分から本館1階案内所にて配布
※メイン会場が満席の場合は中継会場をご案内いたします。
第487回

みんなくセミナー

日時 1月19日(土)13時30分～15時(13時開場)
会場 本館セミナー室
参加費 無料
※参加券を当日12時30分から本館1階案内所にて配布
※メイン会場が満席の場合は中継会場をご案内いたします。
第487回

「インターネットで神さまに「ともだち」になる——当世にインドウー教事情」
講師 三尾稔(本館教授)
インターネットの普及は、インドウー教徒と神がみとのかかわり方をも変えつつあります。フェイスブックで「ともだち」を増やす神の事例をつつじ、インドの宗教とメディアの関係について考察します。



SNSでも人気のあるインドの憑依神 (ラージャスターン州ウダイプル)

みんなくウィークエンド・サロン
研究者と話そう

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」調査している地域(国)の最新情報「みんなく」の展示資料」について分かりやすくお話しします。

1月6日(日)14時30分～15時 アメリカ力展示場
食のグローバル化——アメリカ大陸からの発信と受容
話者 関雄二(本館教授)

1月13日(日)14時30分～15時15分
本館第7セミナー室、日本の文化展示場
岩手県の鹿踊り
話者 林勲男(本館教授)

1月20日(日)14時30分～15時 本館第7セミナー室
インドの子育て——授乳編
話者 松尾瑞穂(本館准教授)

会期 1月22日(火)まで
会場 本館ナビひろば

■関連イベント

「かざってボン！へんしんいのしし」
世界中の人びとが、いのししの牙をつかっていたからだをかざっています。きみなら、どんな風にかざるかをさぐるかな？スタンブールや色えんぴつなどをつかたって絵を描くワークショップです。
日時 1月14日(月)祝
10時～17時(16時30分受付終了)
会場 本館エントランスホール

※当日随時受付、先着200名、参加無料(ただし、本館展示場をご覧になる場合は、展示観覧券が必要です)。
※未就学児は保護者同伴でご参加ください。
ワークショップ
「干支の亥(いのしし)で絵馬をつくろう」
本館展示場にある「いのしし」をスケッチします。
日時 1月13日(日)10時30分～17時
(15時30分受付終了)

受付場所 本館エントランスホール
※当日随時受付、先着80名
参加無料(要展示観覧券)
※参加対象者3歳以上、未就学児は保護者同伴でご参加ください。
※みんなくミュージアムパートナーズによる催しです。
ワークショップ
「おりがみで遊ぼう！干支シリーズ『亥』」
おりがみで干支の「いのしし」を折ります。
日時 1月14日(月)祝 10時30分～11時、
11時～11時30分、11時30分～12時、
13時～13時30分、13時30分～14時、
14時～14時30分
(各回30分程度)

会場 本館エントランスホール
※当日受付、各回先着10名、参加無料
※参加対象者5歳以上
※みんなくミュージアムパートナーズによる催しです。

みんなく映画会、みんなく映像民族誌「アンターマのお客」
涙あり笑いありのイラン映画の名作を上映、食卓とおして、イランの人びと、その日常生活や社会を知りたいと思います。
日時 2月23日(土)13時30分～16時30分
(13時開場)
会場 ホテル阪急エクスボパーク
多目的ホール(オービットホール)
(定員400名)

※申込不要、参加無料
※参加券を当日11時から多目的ホール(オービットホール)前受付にて配布

みんなく映画会、みんなく映像民族誌「アンターマのお客」
本館オリジナルの映像作品である「みんなく映像民族誌」シリーズのなかから選定した作品を上映後、監修者によるトークをおこないます。
会場 淀川文化創造館
シアターセブン(定員60名)
※申込不要、参加無料

「カラハリ砂漠のトランスダンス」
日時 1月12日(土)14時～16時
(13時30分開場)
解説 池谷和信(本館教授)
司会 福岡正太(本館准教授)

「ネパールの30年」
日時 1月26日(土)14時～16時
(13時30分開場)
解説 南真木(本館准教授)
司会 福岡正太(本館准教授)

「アリアン峠を越えていく——在日コリアンの音楽」

ビデオテーク新番組(2018年12月公開)

新しいビデオテーク番組が追加されました。

番組番号	種別	タイトル	地域	監修	時間
7242		Revisiting Batulecaur after 34 Years: A Village of Musicians in Nepal	南アジア	南真木人 寺田吉孝 藤井知昭	53分
7243	研究用映像	Crossing over the Arirang Pass: Zainichi Korean Music	朝鮮半島 ／日本	高正子 寺田吉孝	76分
7244		めばえる歌：民謡の伝承と創造	日本	川瀬慈	58分

国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/ E-mail minpakatomo@senri-f.or.jp

友の会

友の会講演会

会場 本館第5セミナー室(当日先着順・定員96名)
※会員無料(会員証提示)、一般500円
第484回 1月5日(土)13時30分～14時40分
「みんなく名誉教授シリーズ」

南の島の贈りもの、民博からのお返し
研究成果の現地還元とは
講師 須藤健一(堺市博物館館長、本館名誉教授)
人類学者は自身の好奇心と学的関心から飛んでフィールドワークをおこないます。これが現地の人びとの好意に甘えて衣食住をともにし、こぼれや生き方や世界観などを知るための調査方法です。有形無形の文化財も収集します。調査で学んだ貴重な情報や知識や技術や造形は、研究の源となり、博物館の「家宝」です。一方、それは現地の人びとにとってどんな意味や価値があるのでしょうか。人類学者と被調査者のかかわりについて再考します。

第485回 2月2日(土)13時30分～14時40分
アンデスの箱型祭壇が伝えるもの
——農村の生活から歴史記憶まで
講師 八木百合子(本館助教)
数々のミニチュア人形に彩られたアンデスの箱型祭壇は、ペルーを代表する民衆芸術のひとつです。特に20世紀後半から、ペルー南部のアヤクチュ出身の職人たちによって、農村の祭りや生活風景を描いた作品が数多く生み出され、脚光を浴びてきました。一方、そのなかには、農民たちが犠牲となった暴力の歴史を物語る作品も存在します。本講演では、箱型祭壇に描かれた場面について紹介するとともに、歴史的な出来事を主題にした作品が創り出された背景について考えます。

※いずれの講演会も終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。
東京講演会
第125回 3月9日(土)13時30分～14時40分
米國先住民ホビの暮らしと世界観
講師 伊藤敦規(本館准教授)
会場 モンベル御徒町店4Fサロンの
※要事前申込(定員60名)、会員無料、一般500円

日時 2月9日(土)13時30分～16時
(13時開場)
解説 高正子(神戸大学 非常勤講師)
安聖民(ハンソリ演奏家)
司会 寺田吉孝(本館教授)

「中国雲南省大理盆地の回族」
日時 2月17日(日)14時～16時
(13時30分開場)
解説 横山廣子(本館名誉教授)
司会 福岡正太(本館准教授)

第35回人文機構シンポジウム
レクチャーコンサート
「中東と日本をつなぐ音の道(サウンドロード)——音楽から地球社会の共生を考える」
正倉院宝物にある楽器は中東にルーツがあるといわれています。中東と日本の音文化を通じて、国家や民族の境界をこえて地球社会で共に生きることを考えます。
日時 3月23日(土)13時30分～16時30分
(13時開場)
会場 東大寺総合文化センター 金鐘ホール
(定員300名)

講演 森本公誠(東大寺長老)
西尾哲夫(本館教授)
演奏 ウード 常味裕司
サントワール 谷正人
尺八 カイル・カマル・ハロウ
解説 水野信男(兵庫教育大学 名誉教授)
主催 人間文化研究機構
特別協力 東大寺
後援 文部科学省、東洋音楽学会、近畿日本鉄道株式会社

※要事前申込(受付先着順)、参加無料
※往復はがきもしくは左記ウェブサイトの受付フォームにてお申し込みください。
https://www.nihu.jp/a/event/symposium35
お問い合わせ先
第35回人文シンポジウム事務局(千里文化財団内)
06-6877-8893



想像界の生物相

ヒマラヤの雪男イエティ

民博 機関研究員 ふるかわ ふかち 古川 不可知



資料名 | 写真 (雪男のまねをする男)

データ番号 | 上: X0216186、下: X0217358
ネパール写真データベース
<http://htq.minpaku.ac.jp/databases/nepal/>

撮影 | 上: 高山龍三、下: 飯島茂 (ともに 1958 年)

地域 | ネパール

雪男の真似をしているこの男性の姿は、一九五八年にネパール中西部のドルパ郡ツアルカで撮影されたものだ。撮影者の高山龍三先生によると当時の印象は強く残っていないとのことだが、雪男の手足は前後反対についており、走るときは四つ足になって後ろ向きに進むとの伝承もあるため、おそらくその動きを模倣しているのだと思われる。なお日本語の「雪男」は、英語圏の探検家が一九二〇年代から使い始めた「忌まわしき雪男(Abominable Snowman)」という名称に由来する。

◆◆謎の生態◆◆

ネパール・ヒマラヤの雪男は、日本ではイエティという名前でもよく知られている。ドルパ郡からは東南方向に三五〇キロメートルほど離れたエベレスト近くのクンブ地方にも雪男の話が数多く伝わっており、その正体はクマだともサルだともいわれている。またクンブ地方に所在するクムジュン寺院には雪男の頭が、パンボチエ寺院には雪男の頭と手が安置されている。

現地のシェルパの人びとによると、雪男とはおおむね次のような存在だ。クンブ地方には人を食べるミティと動物を食べるチュティ、および悪さだけをやるイエティという三種類の雪男がいる(ただしこ

の区別は厳密ではなく、説明する人によって特徴も入れ替わる。以下イエティと総称)。全身が茶色の毛皮に覆われており、背丈は人間より低いとも高いともいわれる。男女(雄雌)の別があつて山の奥で暮らしている。人語を解さず「ヒュー」という甲高い声を上げるが、高德の僧だけはイエティと会話できる。

山中でイエティと遭遇した話は、高齢者や亡くなった人物の経験談として定型化された語りがよく聞かれる。もつとも定番なのは、現在も存命の、ある老女が若いころに出会ったというイエティの話だ。彼女がマツチエルモの放牧場でヤク(ウシの仲間)を追っていると、突然イエティがあらわれた。イエティは彼女を川に放り込むと、ヤクの角を掴んで体を真つ二つに裂き、そのまま死骸を引きずって山へと消えていった。彼女は川のなかで震えながらその様子を見ていたという。

◆◆雪男の居場所◆◆

だが最近では、イエティに出会うこともほとんどなくなった。ある女性は言う。「むかしの人は村から離れたヤクの放牧場で何日も過ごしていたからよくイエティの声を聞いたし、出会ったりもした。だけど最近は観光客が山のあちこちまで来るよ

うになったから、イエティはどこかに行ってしまったのだ」。

山からはいなくなる一方、イエティはネパールを代表するイメージのひとつとなった。イエティ航空をはじめ多くの会社はその名を冠し、観光地ではイエティを模した土産物が売られている。また特に若いシェルパたちは、しばしば「本で読んだ話では」と留保しながら、生き生きとイエティについて説明してくれた。おそらく観光地化が進むなかで、客の期待に応えるようにイエティの物語も常に語りなおされてきたのだろう。それでも、静かな山村の薄暗い土間で声真似を交えつつ語られるイエティの話は、わたしの背筋を寒くさせるのに充分であった。



イエティグッズ(カトマンズにて2018年に購入)

新世紀ミュージアム

パルメザン・チーズなどのイタリアの食材は、近年、日本でも身近なものとなった。しかし、これらが歴史や環境の面で産地と密接につながっているということはあまり知られていないかもしれない。食の文化を未来へつなげるエコ・ミュージアムから地域振興について考える。



後方に見えるのが、パスタ博物館とトマト博物館が入っている建物。かつて巡礼者の宿舎を兼ねた修道院であり、19世紀に農園となり戦後まで使われていた。現在もその周囲には農地が広がっている(パルマ県コレッキオ町)
©Parma - Musei del Cibo

エコ・ミュージアム

イタリアのほぼ中央に位置するパルマ県に、近年「食の博物館」ができた。イタリアでは、二〇〇〇年前後にいわゆる地方活性化予算が一時増額されたこともあって、各地でそれぞれの文化や歴史にちなんだ博物館が作られるようになった。もともと、多くは規模が小さく、建物も、

新築より既存の歴史的建造物などを利用した簡便なものである。

ただし、それは単なる予算の問題ではなく、エコ・ミュージアムという考え方による。これは近年イタリアでもよく聞かれるようになったことばだが、博物館を地域の文化継承・育成の場とみなし、地域の人びとを巻き込んだ企画をおこなっているというものである。なかでもイタリアでは、食への関心が高いためか、ワインやパンなどをテーマとするものが多く、その歴史や生産技術、祭などの地域文化との関連を示す資料の収集や展示とともに、生産体験を組み込んだ教育プログラムや、試食・試飲などを兼ねたイベントも積極的に展開されている。

六つの博物館

今回取り上げる「食の博物館」もそのひとつだが、さらに興味深い点がある。まず、複数の博物館から成り立っていることである。

結びつきがわかる場所にあるべきであり、さらに観光という意味でも、各地に散らばることによって、市内だけでなく県内全域の活性化につながるのではないかと期待が出てきたのである。

次世代の地域振興に向けて

そして近年、六つ(将来的には七つ)の博物館をつなぎ、周辺の歴史的モニュメントなども加えた「食の道」という観光ルートが整備されつつあるなど、広範囲な観光化の動きは確実に始まっている。もちろん、その思惑がどれだけ当たるかについては、もう少し様子を見る必要があるだろうが、少なくとも各博物館の入場者数は、開館

パルマは、内陸の丘陵地にできた町だが、近郊にいくつか河川を有し、長いあいだその地形が作り出す独特の環境・気象を利用しながらさまざまな食品を生産してきた。早くからローマへの巡礼路などの交通の要であったことも、その発展をうながし、今では「美食の都」ともよばれている。二〇〇三年以降、こうしたパルマの代表的な食として、パルミジャーノ・レッジャーノ(パルメザン・チーズ)、プロシュット・ディ・パルマ(パルマ・ハム)、サラミ、パスタ、トマト、ワインの六つの博物館が次々作られ、「食の博物館」と総称されるようになった。現在、クラテッコ(生ハムの種類)の博物館も建設中である。

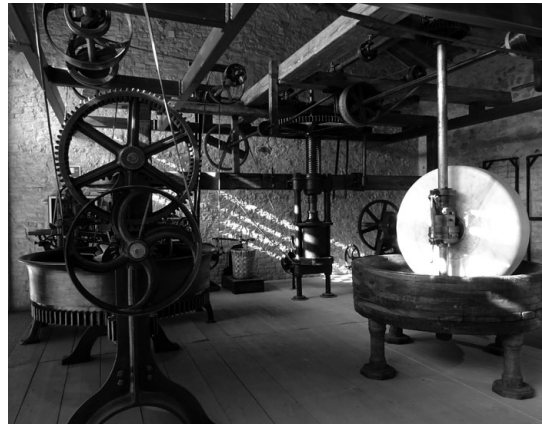
そしてもうひとつ、これらの博物館は、それぞれの生産地に作られているため、同じパルマ県内とはいえ散らばっていることも注目に値する。これは交通の便を考えると、観光などの経済効果があまり望めないように思われる。実際、当初は、外国からの観光客も多いパルマ市内にまとめて作るべきではないかという意見もあったという。

地域に根づく食という考え方と博物館

しかし、食を文化とみなし、適切に理解し継承していくこうとするならば、それが作られてきた環境や歴史を把握する必要

以来、地元住民を中心に着実に増えている。

どの博物館でも、地元住民には入場料を優遇したり、小中学校などに教育プログラムを提供したり、毎年地域を巻き込んだイベントが開催されている。近年、地元の人たちでさえ、グローバル化などの影響によってこれらの食材を口にすることが少なくなっているが、こうした試みをおして、特に次世代の関心が高まることを強く望んでいるという。短期的な観光などの収益増以上に、長期的な地域振興こそエコ・ミュージアムの目的であるという。前館長のことは印象的だった。今後、博物館のありかたを考えるモデルのひとつとしても、なりゆきを見守っていききたい。



上: パルミジャーノ・レッジャーノ博物館の展示場の一部。左手にあるのは、牛乳を凝固させるための蒸気ボイラー式大釜(パルマ県ソラーニャ町) ©Parma - Musei del Cibo
中: パスタ博物館の展示場の一部。19世紀半ばから20世紀前半までのパスタ製造機器のコーナー(パルマ県コレッキオ町、2017年)
下: ワイン博物館の展示場の一部。ワインのボトルリングのコーナー(パルマ県サラバガンツァ町、2017年)



台湾における民主主義と同性婚

野林厚志
民博 学術資源研究開発センター

五〇年におよぶ日本の植民地支配から大陸中国に由来する中国国民党による統治への移り変わりは、台湾住民が少数の外来者によって支配される構造を変えなかった。一九四九年からじつに三八年におよぶ戒厳令のもと、国民党政権は多くの市民を反政府活動などの理由で投獄、処刑した。言論や出版は統制され、国会議員の選挙も凍結した。こうした政治状況のなかで、一九八〇年代の後半から人びとは民主主義を求めた営みを重ねていく。「女朋友 男朋友」は恋愛映画ではあるが、台湾の民主主義とは何かを考えさせてくれる作品である。

男女三人の恋愛と友情

二〇一二年の女子学生の「短パンを履きたい」というシブプレヒコールのプロローグに続き、一九八五年から物語は始まる。幼馴染の小美（女）と阿良（男）、その同級生の阿仁（男）は、全体主義的な管理を方針とする高校のなかで自由をスローガンにした校内誌を作るサークル仲間である。多感な年頃の三人には、方向の異なる恋愛感情が芽生えていた。小美は阿良への想いを秘めながら、自分を好きだと言ってくれる阿仁と交際を始める。阿良は一歩引いたかたちで、三人のなかに恋愛と友情が同居していく。

人の結婚

五年後、阿仁と阿良は学生運動に身を投じていた。一九九〇年、蒋介石を顕彰した国民党権の象徴的な建物である中正紀念堂周辺で、一週間にわたり学生が座り込みをおこなった通称「野百合学生運動」である。この運動は、台湾全体に民主化の意識を強く植えつけたといわれている。運動のさなか、阿良が阿仁に想いをよせてきたこと、阿仁が他の女子学生とも深い仲であることを小美は知る。阿良は自身の性的指向に自覚的になり、男性との関係をもつようになる。三人はそれぞれの道を歩んでいくかのように見える。一九九七年、社会人となった三人は共通のゲイの友人の結婚パーティーを機に再会する。阿仁は政治権力者の娘と家庭もち子どももいるが、小美とは不倫関係にあった。小美は阿仁の子どもを身



1990年の学生運動は国立台湾歴史博物館の常設展「この土地、この民——台湾の物語」に登場する（筆者撮影、2012年）

「GF*BF」

原題：女朋友。男朋友

2012年／台湾／中国語・台湾語／105分／DVDあり

監督：楊雅喆（ヤン・ヤーチェ）

出演：桂綸鎂（グイ・ルンメイ）、張孝全（ジョセフ・チャン）、鳳小岳（リディア・ン・ヴォーン）ほか



台湾の高等学校の歴史の教科書の修正に偏向があることに対し、教員や高校生らが、修正の過程の透明性などを求めて2015年に運動をおこした。学生リーダーの1人が自死する等、台湾社会にとって大きなインパクトを与えた（筆者撮影、2015年）

ごもるが、彼が家庭を捨てられず、出産に危険が伴うこともわかり、墮胎を決意する。阿良もまた妻子ある男性と不倫関係にあった。年齢を重ねるにつれて理想と現実に変化し、それぞれの家族、パートナーとの関係のなかで恋愛と友情のかたちも変わっていった。後半は、いささか自己中心的なアラサー（フォー）世代の「トレンディー・ドラマ」感がぬぐえないが、高校から大学にかけての場面からは、台湾の人たちの民主主義への希求を読み取ることができる。

軍人がいる学校

国民党の政治支配は学校教育にもおよんだ。高校や大学には軍部から「教官」が派遣され、軍事教練をおこなうとともに、校内における政治活動の監視、学生たちの管理をおこなった。本作でも「教官」は重要な役回りである。校内誌の原稿を検閲した「教官」は、

文章中の各文の頭文字をつなげると「我不是你養的狗（わたしはあなたが飼う犬ではない）」となることを見つけ、原稿をばつにする。プロローグでは「短パンを履かせろ」と唱える女子学生たちに、現代の「教官」が大声で静かにしろとその声を封じる。若い世代は、政治弾圧を受けてきた親の世代から歴史を学ぶだけでなく、学校における「教官」

による自由の管理をとおして、今ここにある問題として民主主義を実感している。

同性婚は国民全体で考えるべき問題

本作では、男性同士の結婚式や、男性と女性、男性同士の肉体関係の双方を織り成すように描く場面をとおして、それらが異性婚や異性愛と何が違うのかと問いかけていくようにも思われる。台湾では民主化の流れにあわせるかのように同性婚を求める動きが顕在化した。賛否はともかく、同性婚や同性愛についての社会的な認知度は比較的高い。

二〇一八年一月二十四日の台湾の統一地方選挙では、地方政治の首長や議員の選出に加えて同性婚の是非を問う国民投票（台湾では「公民投票」）がおこなわれた。二〇一七年の五月に、台湾の憲法裁判所にあたる司法院大法官会議が、同性婚を可能としない現行の民法は違憲であると判断し、二年以内の法的対応を求めた。今回の国民投票はそれを受けての実施となった。結果は、民法の定める婚姻は認めず、「共同生活をしその権利を認める」ためのあらたな法整備をおこなうという消極的肯定となったが、現時点での民意を明らかにしたという点においては評価されるべきであろう。

台湾の選挙の投票率はおしなべて高い。それは、自分の一票が自分たちの運命を大きく変える一票であることを肌身に感じてきたからである。そして、同性婚の是非を国民投票ではかろうとした台湾では、それが国民一人一人の意思を確認するべき民主主義の問題であると認識されているのだろうか。

風の名前はジャーゴンなのか？



What's in a name?

福島 あずさ 神戸学院大学講師

大学で講義をしていると、学生が眠りに落ちる瞬間を目にすることがある。そんなときは、使っていることばが難しかったり、説明が足らなかつたかもしれない、と自省する。学生たちは初めて聞く内容を理解しようと努めているが、こちらが知らないことばを並べ立てれば、つい眠気におそわれても仕方がない、と。

こう考えるようになったのは、短期留学先のアメリカで「ジャーゴン（専門用語、身内言葉）はできるだけ使わないように」と注意を受けたためである。当時筆者は大学院生。早く世界中の研究者とカッコよく議論できるようになりたいたいと思っていた。しかしその指摘によって、自分の使うことばがあくまで、同業者のあいだでしか通じない「業界用語」であることに気がついた。

昨年執筆した『窓から見える世界の風』（創元社）では、世界各地で名付けられた五〇の風を、その特徴やそれにつわるエピソードなどとあわせて紹介した。しかしじつは、紹介した風の名前の多くが、アメリカ気象学会の用語集に掲載されているジャーゴンでもある。そもそも、専門家向けの用語集になぜ各地の風の名があるのか。

「おろし（日本）」、「フェーン（アルプス）」、「シロッコ（地中海沿岸）」などの風の名は、古くから人びとのあいだで使われてきた。アルプスのフェーンという風は、春先に決まって急な気温の

上昇を伴って吹くため、住民たちのあいだでは、雪解けと作物の植え付けを始める合図だったという。二〇世紀初頭に、研究者たちがその風のメカニズムを研究した結果、山を越えて吹く風が風下側で温度上昇をもたらす現象として、気象学の理論のひとつとなった。今日その現象は、世界中の人びとに「フェーン（現象）」とよばれている。つまり「フェーン」は、一部の地域の人びとが語り継いできた風の名が、学問によって、別の意味をもつジャーゴンに変わってしまったことば、といえる。

一方、すべての風の名前が重要なジャーゴンとなるわけではない。日本各地の「おろし」や「だし」といった風は、「山越え気流」や「地峡風」など、メカニズムをあらわすことばによって説明され、残念ながら世界の「オロシ」、「ダシ」とはなっていない。各地にはまだメカニズムが十分明らかになっていない風があるので、将来的にあらたな現象が発見され、その風の名が重要なジャーゴンとなる可能性は十分にある。用語集に多くの風の名が収録されているのはそのためだろう。研究者としては、そんな「業界」のニュースの動向に期待が高まる。一方、学生たちからすると、すでに人びとの手を離れてしまったことばが並ぶ講義は、あくまで日常とかけ離れた世界としか感じられないに違いない。

編集後記

今月は新年号ということで風の特集とした。幼少期を愛知県で過ごした小生は、名古屋城の金鯰泥棒の逸話を明治生まれの祖父より耳にしたことがある。江戸時代に名古屋城の天守閣から金鯰を盗んだ盗賊がおり、大正時代にも風には乗らなかったようだが金の鱗を狙う泥棒が出たということであった。少し検索してみると（特に名古屋市鶴舞中央図書館のレファレンス事例詳細は参考になった）、大風の逸話は江戸時代の盗賊・柿木金助の伝説で、史実と異なり、彼の盗みは歌舞伎「傾城黄金鯰」によってひろく知られる。もっとも、ある研究によると、歌舞伎に大風のシーンができたのは明治以降とのこと。重たい金を懐にいれたら城から逃げるときに風に乗れないだろうにと子ども心に思ったものだが、余計な心配だったようだ。なお明治21年に刊行された『柿木金助実伝』という作品には名古屋城ではなく清洲城の天守閣に足をかける柿木金助の挿絵が掲載されている。晩年に清洲に居を構えていた祖父が生きていたら、正月のいい話の種になったのだが。（丹羽典生）

【追記】2018年12月号「特集」P6下の写真の撮影者は、山本紀夫 本館名誉教授です。

●表紙：左から順に

- 1、インド・パキスタンの風（撮影：小西正捷）
- 2、インドネシアの風（H0005913）
- 3、インドネシアの風（提供：世界風博物館東近江会館）
- 4、グアテマラの風（H0200526）
- 5、タイの風（H0028763）
- 6、タイの風（H0005844）

次号の予告

特集

「南アジア、弦の響き」（仮）

みんなぱくをもっと楽しみたい方のために 国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんなぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。

毎月『月刊みんなぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員

『月刊みんなぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加 など

ミュージアム会員

『月刊みんなぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加 など

繰り返し入館できる**みんなぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もご紹介します。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話 06-6877-8893 / 平日9:00～17:00)



月刊みんなぱく 2019年1月号

第43巻第1号通巻第496号 2019年1月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子

編集委員 丹羽典生（編集長） 寺村裕史 三島禎子
南真木人 山中由里子 吉岡乾

デザイン 宮谷一 長岡綾子

制作・協力 一般財団法人 千里文化財団

印刷 毎日新聞社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんなぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんなぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official>

みんなぱくツイッター

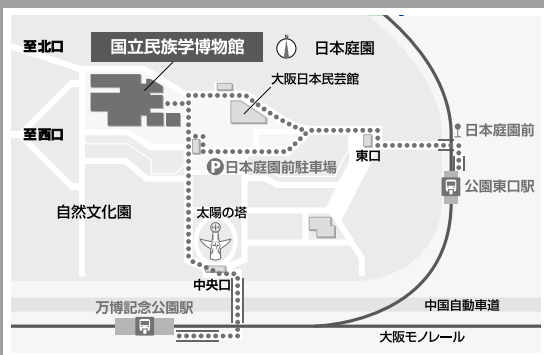
<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

みんなぱくインスタグラム

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

みんなぱくYouTube

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>



みんなのほくぶつかん みんなぱく

MINPAKU

年末年始展示イベント「いのしし」

毎年恒例のみんなぱくの干支展、今年は「いのしし」です。約160点の「いのしし」関連資料を、以下の3つのコーナーにわけて展示し、人類がいのししのどのような「かたち」に魅せられてきたのか探ります。本誌2018年12月号「〇〇してみました世界のフィールド」でも本展について紹介していますので、あわせてご覧ください。

【かざる】：世界各地の装飾品には、いのししの牙、尻尾、歯などが使用されているものがあります。特に「渦巻く牙」は必見です。

【つかう】：釣り針、靴、盾、楽器、スプーンなど、人びとは生活用具にもいのししのさまざまな部位を取り入れてきました。

【めぐる】：人形、土鈴などの愛玩具や絵画にもいのししの姿が描かれています。



日本各地の絵馬を見比べるのもおすすめです



インドの首飾り
(H0109171)

日本の土鈴
(H0143060)

会期：1月22日（火）まで

場所：本館展示場 ナビひろば

（探究ひろば横休憩所にて写真展も開催しています）

レシピで味わう 世界の食文化

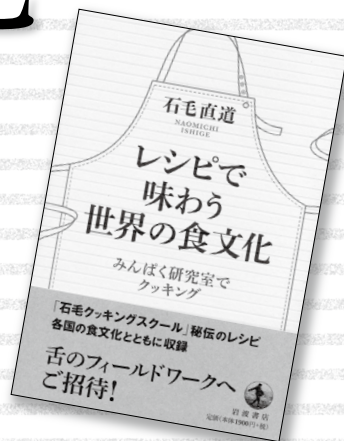
作って、食べて、
読んで楽しむ、
世界の食文化

みんなぱく研究室でクッキング

石毛直道

著者は、フィールドワークで訪れた世界の国々で、現地の日常的な料理を欠かさず味わってきた。帰国後、国立民族学博物館（みんなぱく）の研究室で腕をふるい、その味を再現、職員たちから「石毛クッキングスクール」と呼ばれ親しまれたという。本書では、当時のレシピを、その背景にひそむ興味深い食文化と共に紹介する。

四六判 本体1900円



〔定価は表示価格+税〕

岩波書店



〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
<http://www.iwanami.co.jp/>